KJFC 例会

2016 年 1 月 23 日

特集：日本のジャズ・ピアニスト　第 1 章

担当：紅　我蘭堂

日本のジャズ・ピアニストを２回に分けて聴いていただきます。私にしては本当に珍しくアカデミックに進めて行きたいと考えています。もっともうまく継続できるかは保証できませんが。

本日は第 1 章として、少し戦後からのモダンジャズ・ピアノの流れを概観するとともに、私が好きなふたりのピアニストのミニ特集をします。

後日、第 2 章として個性的なピアニストをなるべく多く紹介させていただく予定です。

さてご存じのように日本人ジャズは、《ポンジャズ》などと蔑称されて「やっぱモノホン（本物）のジャズにはかなわねえや」などと言われています。いくら技術が向上しても野球やサッカーなども、やはり本場の歴史というか、何よりも雰囲気というか感覚が微妙に吸収・消化されていないことは事実です。

また日本人プレイヤーも流行に左右されすぎました。エレクトリック・ピアノやベースが流行ればすぐに飛びついたし、リターン・トゥ・フォーエバーが売れれば、同じような演奏をするという具合で、ファンから見くびられてもやむを得ない場面もありました。

相対的に「日本人ジャズは、所詮（しょせん）本場アメリカの物真似じゃないか」と言われます。しかし物真似は本当にいけないことでしょうか。考えてみてください。人間の一生は物真似で始まります。赤ちゃんは大人の言葉や行動をパクりにパクッて成長していきます。わが国は古来遣隋使や遣唐使などから大陸文化を学び、日本独特の文化を生み出しました。そして逆に日本独特の文化・芸術は世界に影響を与えています。1 例をあげると浮世絵はヨーロッパの画家たちにも影響を与えていました。ゴッホもその一人と言われています。

そうです。学んで、影響を受けて、オリジナリティを創造する。批判される理由はありません。

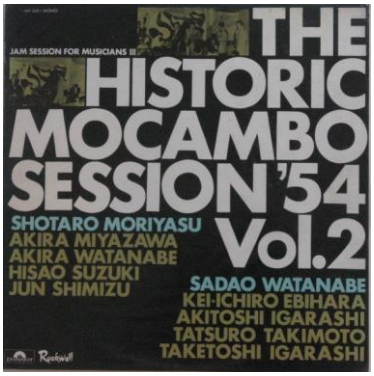
横浜にあった伝説的なジャズ喫茶「ちぐさ」のマスター、故吉田　衛氏の文章を引用します。「（前略）今のように、毎月何百枚という新譜が発売される贅沢な時代と違って、当時はまだ新譜も数える程だった。だから店から流れるジャズのサウンドを聴きつけて、昔のファンやナベサダ、秋吉、日野などの若きプレイヤーが次々に訪ねてくるようになった。彼らは当時、進駐軍のクラブで演奏していたが、そこで要求される新しいジャズが、譜面だけでは感じをつかめないといって、毎日聴きに来ては感じをつかもうとしていたんだ。ジャズってのは譜面なんかじゃどうにもならない音楽なんだ。秋吉なんかは、「そのフレーズをもう１ぺん」と何度も同じフレーズのところに繰り返し針を置かせた。店に足繁く通ってくれた若きミュージシャンたちの、レコードに聴き入る熱い姿が目に浮かんでくる。

二年前になるが、そんな頃の奴らが私のために店に集まってくれた時は嬉しかったなあ。シャープの

原、クレージーの谷や石橋、安田、それにニューヨークからわざわざ秋吉と日野も来てくれた。そしてみんなで演奏してくれたんだ。こんな贅沢はほかにあるか？（後略）」　はい、そんな贅沢はほかにありません。少し長くなりましたが 1991 年に出版されて、2015 年に復刻された『ジャズ喫茶が熱かった日々』より引用させていただきました。アンダーラインは私が付けましたが、ジャズという音楽の本質と、いわゆる「感覚」と学び取ろうとする雰囲気がよく現れている箇所です。今でこそバークリーだ何だといって留学してジャズを「学んで」くるプレイヤーが大勢いますが、モダンジャズの初期は本当に苦労されていたことがしのばれます。

　またこの“感覚”については、当時進駐軍の 1 兵士として日本に滞在していたピアニストのハンプトン・ホーズの実際の演奏からも多く学んだと伝えられています。

守安祥太郎



『THE HISTORIC MOCAMBO SESSION'54 Vol.2』(ポリドール MP2491・MONO)

守安祥太郎(p)、渡辺貞夫(as)、渡辺明(as)、五十嵐明要(as)、海老原啓一郎(as)、滝本達郎(b)、五十嵐武要(ds)　他　1954 年 7 月 27 日～28 日

SIDE A 1)ON A SLOW BOAT TO CHINA　2)EVERYTHING HAPPENS TO ME　3)STEEPLE CHASE

SIDE B　1)PERDIDO

　1954 年といえば、アメリカでは 2 月にアート・ブレイキーがクリフォード・ブラウン、ルー・ドナルドソンを擁してバードランドでのライブ録音を残したり、そのブラウンがマックス・ローチとグループを結成したり、マイルス・デイビスもぼちぼちとレコードを吹き込んでいました。何といっても、あのチャーリー・パーカーがまだ生きていました。またわが国では、朝鮮戦争による特需景気に沸いていたという年でした。そのような時期に横浜にあった『モカンボ』というジャズクラブでジャムセッションが行なわれました。その様子を記録したレコードが LP4 枚にまとめられて出されました。天才と言われた守安祥太郎の貴重な演奏が残されました。若き日のナベサダや宮沢昭たちの熱気ある演奏は、荒削りだけど貴重です。演奏時間が長いので、B 面の守安のソロ部分だけ聴いていただきます。

　繰り返しますが、1954 年の演奏です。この翌年に守安は自殺してしまいました。

穐吉敏子

『TOSHIKO HER TRIO HER QUARTET』(STORYVILLE STLP-918)

　穐吉敏子(p)、OSCAR PETTIFOFD(b)、ROY HAYNES(ds)　他

1)KELO 2)SALUTE TO SHORTY 3)PEA,BEE, AND LEE 4)TAKING A CHANCE ON LOVE　5)ALL THE THINGS YOU ARE　6)NO MOON AT ALL 7)I REMEMBER APRIL 8)THOU SWELL

1956 年 7 月録音

前述したように、ジャズ喫茶『ちぐさ』の吉田マスターに、繰り返しレコードの針を置き直させた穐吉敏子は、1953 年に来日したオスカー・ピーターソン(p)の楽屋まで押しかけて自分を売り込んだと言います。そして、その情熱が認められて 1956 年 3 月、日本人としては初めてバークリー音楽院に留学しました。それ以前には 1954 年に VERVE に録音を残しています。それは『アメイジング・トシコ・アキヨシ』(MGM－22)として 1957 年録音のものとカップリングされて残されています。また 1956 年に録音された『ザ・トシコ・トリオ』(STORYVILE)も有名です。今回掛けるこのアルバムを含めて、3 枚のレコードは穐吉敏子さんの前期代表作です。穐吉さんは日本人ジャズの嚆矢でした。56 年に初めてアメリカに乗り込んだときには、咸臨丸を操って米国に乗り込んだ勝海舟のような気分だったのではないでしょうか。そうは言っても、私には守安さんも穐吉さんも古臭い印象があります。

『TOSHIKO MEETS HER OLD PAL』(KING　SKK 3018)
穐吉敏子(p)、渡辺貞夫(as)、宮沢昭(ts)、原田政長(b)、富樫雅彦(ds)他
SIDE A　1)<u>SO WHAT</u>　2)THE NIGHT HAS A THOUSAND EYES 3)DONNA LEE
SIDE B　1)QUEBEC　2)OLD PALS 3)WATASU NO BIETHOVIN

もう 1 枚は 5 年後の 1961 年に帰国した際、録音されたものです。お聴きいただくと分かりますが『HER　TRIO　HER　QUARTET』がコテコテのビ・バップ色だったのに較べて、全体にモード色が強くなっています。そうです、マイルス・デイビスが 1959 年に『KIND　OF　BLUE』を発表しています。穐吉さんもナベサダも宮沢昭も、濃い影響を受けています。穐吉さんもバド・パウエルよりもビル・エバンスになっています。

『MISTY』(TBM　tbm30 or tbm2530)
山本　剛(p)、福井五十雄(b)、小原哲次郎(ds)　　1974 年 8 月 7 日録音
SIDE A　1)MISTY　2)<u>BLUES</u>　3)YESTERDAYS
SIDE B　1)HONEY SUCKLE ROSE　2)SMOKE GETS IN YOUR EYES　3)I DON'T KNOW
WHAT TIME IT WAS　4)ANGEL EYES

さて 10 年以上時間を飛ばします。この間、日本のジャズ・ピアニストも菊池雅章さん、佐藤允彦さん、本田竹彦(竹曠)さん、市川秀男さん、今田　勝さん、板橋文夫さん、辛島文雄さん、菅野邦彦さん、八城一夫さん、世良　譲さん、そして山下洋輔などが活躍されましたが割愛いたします。1960 年代・70 年代前半はキングレコード、日本コロムビア、日本ビクターなどのいわゆる大手の他にトリオ、パイオニアのオーディオ・メーカーがレコード会社を設立して盛んに日本人プレイヤーのレコードを発表していました。経済が好景気で国内全体が“イケイケ”ムードだったのでしょう。
マイナー・レーベルも誕生しました。それが『THREE　BLIND MICE』(略称：TBM)です。このレーベルについてはまた別の機会にご紹介したいと思います。この TBM は多くの日本人プレイヤーを紹介してくれましたが、初期の代表的なピアニストがこの山本剛さんでしょう。山本さんといえば、すぐにこのアルバムのタイトル曲が思い浮かばれます。

でも本日は別の曲をお聴きいただきます。MISTY の甘美なイメージとは別な側面があります。特に力強い左手のブロック・コードは聴き所です。

【ミニ特集　1】田村　翼

1970 年代になって、ようやく“感覚”がアメリカ人に近いプレイヤーが現れました。それが田村　翼さんです。田村さんは 1940 年生まれ。大阪音楽大学在学中からジャズに興味を持ちはじめて自己のグループを結成して 1963 年から活動開始。ハンプトン・ホーズ(p)を敬愛していました。1960 年代半ばから、おもに大阪のクラブやライブハウスで演奏。この間来日したアート・ブレイキー(ds)、ジミー・コブ(ds)、ハロルド・ジョーンズ(ds)、フレディー・グリーン(g)、ビル・ハードマン(tp)、ジョニー・コール(tp)、ブルー・ミッチェル(tp)、サラ・ヴォーン(vo)など来日したプレイヤーとセッションを行なったそうです。1976 年にはアート・ブレイキー＆ジャズ・メッセンジャーズの日本公演にピアニストの代演としてツアー。1978 年にはバーニー・ケッセル(g)でツアー。1981 年にはソニー・スティット(as,ts)グループでツアー。などなど来日したプレイヤーと国内ツアーも行なっていました。そこで本場アメリカの“感覚”を養ったと想像できます。1996 年 1 月に癌のために死去。追悼盤 1 枚を含めて 9 枚のレコードを残しています。

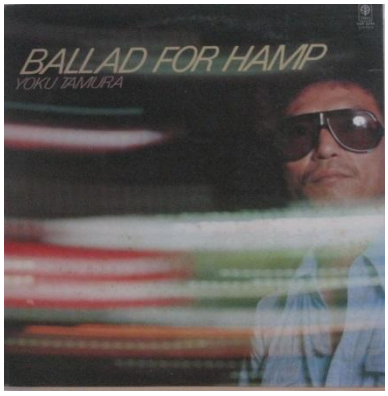
1．『BALLAD FOR HAMP』(TRIO)　1977 年 7 月 26 日録音
　田村　翼(p)、池田芳夫(b)、岡山和義(ds)
2．『JAZZ　PRESTIGE』(TRIO)　1979 年 1 月 21 日録音
　田村　翼(p)、ANDREW　SIMPKINS(b)、FRANK　GANT(ds)
3．『YOU　AND　ME』(TRIO)　1979 年 8 月録音
　田村　翼(p)、RED　MITCHELL(b)、DONALD　BAILEY(ds)
4．『MEMORIES　OF　SUMMERTIME』詳細不詳
5．『SWEET　奄美』(TRIO)　1980 年 8 月 9 日録音
　田村　翼(p)、大場景弘(b)、MICHAEL　REZNIKOFF(ds)
6．『BLUE　WING』(TRIO)　1981 年 4 月録音
　田村　翼(p)、ANDREW　SIMPKINS(b)、楠本卓司(ds)
7．『LOVE　BALLADS』(ART　UNION)　1993 年 4 月 2 日録音
　田村　翼(p)　※ソロ・ピアノ
8．『SWEET　AND　LOVELY』(ART　UNION)　1994 年 10 月録音
　田村　翼(p)、伊藤　潮(b)、佐々木　豊(ds)
9．DEPARTURE(ART　UNION)1995 年 12 月 10 日録音
　田村　翼(p)、伊藤　潮(b)、佐々木　豊(ds)　※死後の追悼盤

このうち 3 枚目のリーダー・アルバム『YOU　AND　ME』で共演したベーシストのレッド・ミッチェルは以下のように述べています。

「私はヨク・タムラとドナルド・ベイリーと一緒にレコードを残せて非常に幸福である。私の父は人間の霊魂の存在を信じていたので、小さい時から、誰々の霊魂が乗り移ったなんてよく聞かされていたが、ヨクのピアノを聞いた時にまさにハンプトン・ホーズの霊魂が乗り移ったと感じたね。従って、このレコーディングで、私は昔のホーズと演った時のフィーリングをそのまま発揮することができた（後略）」。多少の社交辞令はあるとしても、ハンプトン・ホーズとコンテンポラリー・レコードを中心として多く

のレコードを残したレッド・ミッチェルの言葉には重みを感じます。

演奏を聴いていただければわかりますが、タッチが従来のピアニストより“バタ臭い”です(古臭い表現ですが)。演歌でいう“こぶしの利かせ方”が黒っぽい(けっして差別語ではありません)です。



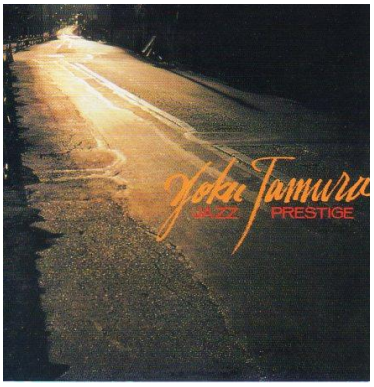
『BALLAD FOR HAMP』(TRIO)

田村　翼(p)、池田芳夫(b)、岡山和義(ds)　1977 年 7 月 26 日録音

SIDE　A　1) AU PRIVAVE　2)YOU GO TO MY HEAD　3)FOR CARL　4)IN THE FIRST FLIGHT

SIDE　B　1)WHISPER NOT　2)SOFTRY AS IN A MORNING SUNRISE　3)BALLAD FOR　HAMP

初リーダー・アルバム。ご存じチャーリー・パーカー差曲の「アウ・プリヴァーブ」からお聴きください。ハンプトン・ホーズに奉げた「バラード・フォー・ハンプ」はホーズへの尊敬の念がこもった熱演です。

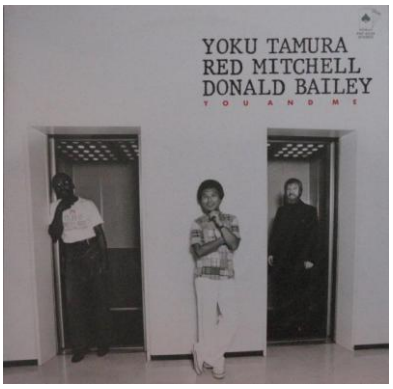


『JAZZ　PRESTIGE』(TRIO)

田村　翼(p)、ANDREW　SIMPKINS(b)、FRANK　GANT(ds)　1979 年 1 月 21 日録音

1.TAKE THE A TRAIN　2.THE NEARNESS OF YOU　3.BLUE BOSSA　4.ON GREEN DOLPHIN STREET　5.SATIN DOLL　6.BLACK ORPHEUS　7.SONNYMOON FOR TWO

2 作目のバックの２人はモンティ・アレキサンダー(p)とトリオを組んでいた。特にシンプキンスはＢＬＵＥ　ＮＯＴＥレコードに多くにレコードを残した『THE THREE SOUNDS』のメンバーだったのでなじみ深い人も多いでしょう。バラードをじっくりと。



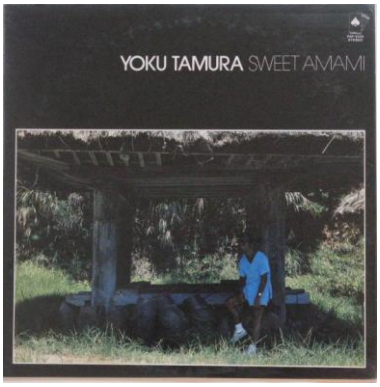
『YOU　AND　ME』(TRIO)

田村　翼(p)、RED　MITCHELL(b)、DONALD　BAILEY(ds)　1979 年 8 月録音

SIDE　A　1)BLUES　BANK　2)ALL　THE　THINGS　YOU　ARE　3)EASY LIVING　4)YOU AND ME

SIDE B 1)STRAIGHT FLASH　2)WILLOW FOR ME　3)GREEN & PEACE　4)HAMP'S BLUES

前述のレッド・ミッチェルとの共演盤。



『SWEET　奄美』(TRIO)

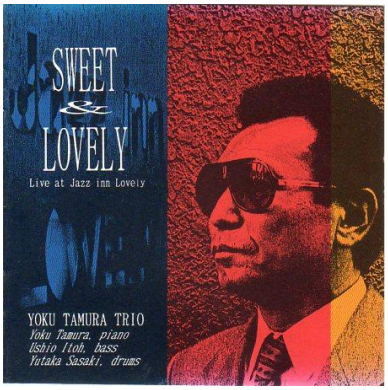
田村　翼(p)、大場景弘(b)、MICHAEL　REZNIKOFF(ds)　1980 年 8 月 9 日録音

SIDE A　1)SUMMERTIME 2)A NIGHT IN TUNISIA 3)BLUES FOR “TONJI”

SIDE B　1)I'LL REMEMBER APRIL　2)POLKA DOTS AND

MOONBEAMS 3)SWEET AMAMI
ライブ盤です。ご存じの曲がどのように料理されているでしょう。

『BLUE WING』(TRIO)
田村　翼(p)、ANDREW　SIMPKINS(b)、楠本卓司(ds)　1981年4月録音
1)DAP'S GROOVE　2)COOL STRUTTIN' 3)GEE BABY AIN'T I GOOD TO YOU　4)BLUE WING　5)ROBBINS NEST 6)WALKIN'



『SWEET AND LOVELY』(ART UNION)
田村　翼(p)、伊藤　潮(b)、佐々木　豊(ds)　1994年10月録音
1.HOGTOWN BLUES　2.MOANIN　3.BILLY HOLIDAY MEDOLEY　4.SWEET & LOVELY　5.MANTECA　6.MY CONCEPTION　7.S.K.J.　8.SHINY STOCKINGS　9.BERKLY BLUES

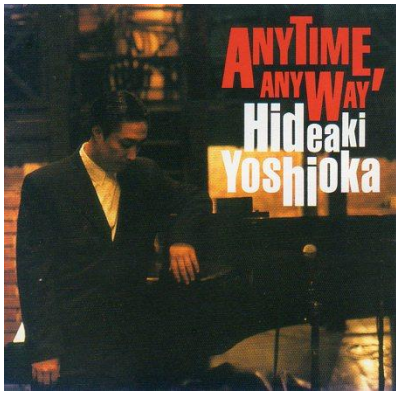
【ミニ特集　２】吉岡秀晃

大雑把に言わせてもらえば、ホレス・シルバーとウイントン・ケリーに、ちょっぴりレッド・ガーランドを加えれば吉岡秀晃のスタイルになります。さらに言えば時としてボビー・ティモンズやフィニアス・ニューボーン・ジュニアあたりも顔を出します。その演奏の魅力はズバリ“LIVE”です。とにかく手数(てかず)が多い演奏をします。これは客を喜ばそうとするエンターテイメント性も持っている証しです。
吉岡の正規発売のリーダー・アルバム(CD)は以下の6枚があります。
1.『HERE　WE　GO』(FUN　HOUSE)　1990年7月17日18日録音
※全8曲のうち7曲が吉岡のオリジナル曲。1部カルテットまたはクインテット編成。
2.『ANYTIME　ANYWAY』(FUN　HOUSE)　1991年4月9日―11日録音
※全7曲すべて吉岡のオリジナル曲。ピアノ・トリオ編成。
3.『ALL　WAYS』(FUN　HOUSE)　1992年6月22日23日録音。
※全8曲すべて吉岡のオリジナル曲。ピアノ・トリオ編成。
4.『STRONG　MAN』(FUN　HOUSE)　録音年月日不詳(1994年録音？)。
※全15曲収録。ソロ・ピアノ集
5.『DOIN' IT RIGHT/LIVE　AT　BROWNY』(BROWNY)　1998年12月15日録音。
※九州福岡の『BROWNY』におけるライブ盤。全7曲収録。

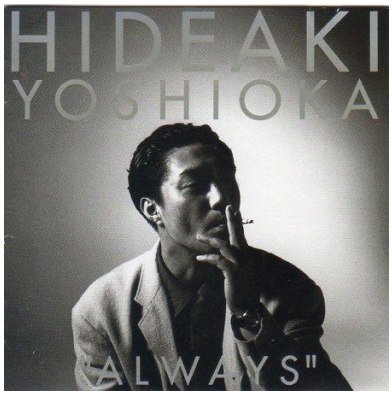
6.『MOMENT　TO　MOMENT』(VENUS)　2000 年 5 月 31 日録音。
※レッド・ガーランド最晩年のトリオ・メンバーであるジャミール・ナッサー(ｂ)、
ジミー・コブ(ds)と共演。ニューヨーク録音。

この他にも他のプレイヤーのセッションにも参加しているので、吉岡の 30 年以上にわたる経歴からすれば可もなく不可もないリーダー・アルバム枚数と言えるかもしれません。
初期のころはオリジナル曲で勝負に出ていました。その姿勢は悪くないです。しかし私はこのリーダー・アルバムが吉岡の持ち味であるアーシーでファンキーでグルーヴィーな特徴が表現されきっていないと断言できます。吉岡の良さは、それこそ“一期一会”のライブ演奏で発揮されています。
余談ですが、プレイヤーは自分のリーダー・アルバムを発表することを、どのように感じているのでしょうか。ギタリストの故・小西　徹さんは生前何度もあったリーダー・アルバム制作の話のたびに「時期尚早！」と断り続けたそうです。また同じギタリストの宮之上貴昭は、ライブの前に店の人が、彼の過去の CD を掛けたところ、血相を変えて「自分の昔の音は聴きたくない！！　掛けないでくれ！」と抗議している場面を私は目撃しました。常に高みを目指しているプレイヤーにとって、自分の過去の記録(レコード、CD)は重荷・負担になるのかもしれません。

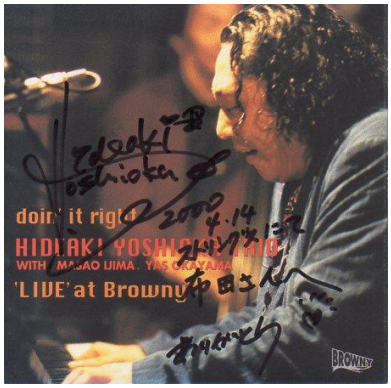
吉岡は 1960 年 2 月 1 日に宮崎県延岡市に生まれました。九州男児です。19 歳のときに来日していたレッド・ガーランドトリオのジャミール・ナッサー(b)、ジミー・コブ(ds)と共演してガーランドから絶賛されたことがきっかけとなってプロデビューしたとなっています。



『ANYTIME　ANYWAY』(FUN　HOUSE)
吉岡秀晃(p)、沼上　励(b)、藤沢博延(ds)　1991 年 4 月 9 日―11 日録音
1)SHOUT　OF　JOY　2)SCENE　3)RED,REDD　4)IN　THE　GROOVE　5)WIRED　6)NATURE　AND　SENTIMENT　7)ANYTIME,ANYWAY
「RED,REDD」は恐らくレッド・ガーランドとフレディー・レッドだと推測される。面白い曲展開です。「IN　THE　GROOVE」はボビー・ティモンズの「ダット・ディア」を彷彿する出だしだけど、途中から変化する。この辺が面白いです。



『ALL　WAYS』(FUN　HOUSE)
吉岡秀晃(p)、坂井紅介(b)、日野元彦(ds)　1992 年 6 月 22 日 23 日録音。
1)AHA,BUD 2).DOING 3)QUIET MESSAGE 4)A MAN COME BACK 5)CASUALLY 6)PASSIONATE 7)STRANGE DANCE 8)ALWAYS
３作目のリーダー・アルバムです。ここまではすべてオリジナル曲で勝負していました。それぞれ魅了的な曲であります。今回はバド・パウエル(p)に対して尊敬の念をこめて奉げた「AHA,BUD」をお聴きください。



『DOIN' IT RIGHT/LIVE AT BROWNY』(BROWNY)

吉岡秀晃(p)、井島正雄(b)、ヤス岡山(ds)　1998 年 12 月 15 日録音

1)Mr.WONDERFUL　2)BACK AT CHICKEN SHACK 3)THINKING OF YOU 4)GROOVE YARD 5)ON STAGE 6)MAKE THE MAN LOVE ME 7)MILESTONES

福岡市に『BROWNY』というジャズクラブがあったそうです。今はないと聞いています。そのライブの模様を、恐らくオーナーの方を中心にして自費でリリースされたらしい CD です。

『A TIME FOR LOVE ～ MONK'S TRIO Ⅱ』(WHAT'S NEW RECORDS WNCJ-2144)

小林陽一(ds)、吉岡秀晃(p)、ETHAM 吉岡(b) 2004 年 7 月 14 日録音

1)A TIME FOR LOVE 2)UN POCO LOCO 3)LONG AGO AND FAREWAY 4)NERO 5)STRIKE UP THE BAND 6)THE MOON IN RIO 7)MISTY

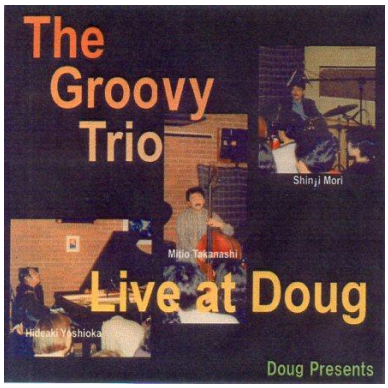
ドラマー小林陽一が結成しているモンクス・トリオに吉岡がフィーチャリングされた CD です。さらに珍しいことに息子の吉岡沙生(ETHAM)と共演しています。ブルースをじっくりお聴きください。

長崎県波佐見市に『ＤＯＵＧ』という名門ジャズ喫茶があります。オーナーの立石　聡氏は「九州ジャズユニオン」の会長を務められていて九州のジャズシーン全体の底上げに力を入れておられます。ＫＪＦＣとは渋谷秀夫さんを通して知り合い、会報ＧＲＯＯＶＹを送らせていただいています。その立石さんがある時、拙文を読まれて、ぜひＫＪＦＣの皆さんで聴いていただきたいという趣旨で、吉岡の「ＤＯＧ」におけるライブの模様を収めたＣＤを送っていただきました。このご好意になかなか応えることができなかったのですが、本日一部を披露させていただきます。

ライブの記録は

1. 1990 年 10 月 12 日　2. 1991 年 10 月 16 日　3. 1994 年 3 月 24 日　4. 1997 年 3 月 22 日

の 4 回です。この中には吉岡が 40 度以上の高熱をおして演奏したものも含まれています。いずれも吉岡の特徴がよく出ている熱狂的なライブ演奏です。この 4 回のライブの中から 2 曲を聴いてください。



『THE GROOVY TRIO LIVE AT DOUG』

吉岡秀晃(p)、高梨道夫(ｂ)、守　新治(ds)　1997 年 3 月 22 日録音

1)IF YOU COULD SEE ME NOW 2)BLUES ON PURPOSE 3)TENOR MADNESS 4)CARAVAN 5)BILLY BOY